

家族と私と新聞と

会津若松市 はたけやま
一箕小6年 畠山 冬萌さん

私は小さいころ、自分の名前にちなんだ「ともえ新聞」をつくっていました。内容は、今読み返せばとてもぐちゃぐちゃで、意味が分からないものばかりでしたが、とても書いていて楽しかったのを覚えています。はずれた天気予報を書いたり、テレビらんを書いたりしていました。でも、それはただおもしろがっただけで、お母さんやお父さんに喜んでもらえるように書いたのだと思います。初め

て書いた時の「すごいねえ」がまた聞きたい。ともえ新聞を見て元気をだしてほしい。そう思っ書かからこそ、ともえ新聞はおもしろくなっているのではないのでしょうか。ですが、新聞を書くのは、とても大変だったように思います。なおさら、ふつうの新聞は文字が何十万字もあります。それを毎日毎日書くのは、とても大変です。記者さんは毎日取材をして、編集者さんは記事をまとめ

て。そのほかにいろいろな人の手が加わって、いつも新聞が届くのではないのでしょうか。ともえ新聞とふつうの新聞はちがくても、「だれかに元

気や笑顔を届けたい」という目標は同じだと思えます。新聞をつくってくれている人みんなに感謝しながら読みたいと思います。これから生きていくのだということ強く思ったのです。長女が字を覚えた頃に、手作りの新聞を発行してくれたことがあります。長女の名前を冠した「ともえ新聞」は見真似の政治の記事や天気予報、作り話の重大事件はまたまた占いでついているという力作でした。これがとてもおもしろく、「次も楽しみにしているね」という私に、長女はその後何度か発行してくれました。あの頃の長女の目には、新聞は「大人が喜ぶもの」として映っていたのだと思います。

新聞と生きる

母 畠山 梢さん

三月十二日の新聞に青

菜つつんで我は呟く明日も生きる明後日も生きるこれは、買って来たばかりの青菜を保存するた

め、いつものように古新聞を広げた際に書き留めた私のつたない一首です。その紙面には、震災で

亡くなった方々を慰霊するために行われた各地の行事の様子や遺族の想い、成長した子供たちのことがぎゅっと詰め込まれていました。青菜ごしにそれを読みながら、「特別な一日」を乗り越えて今日があるということ、自分たちは

私にとって新聞は、窓です。それはとても大きく、不思議な窓。自分の目では見えない場所のことや、聞こえない声まで届けてくれる窓です。窓からは風も吹いてきます。三月十二日の新聞のように、その風が私の背中を押してくれることもあります。夜更かしをした深夜二時。静かに玄関のポストに差しこまれる新聞の音が、我が家に新しい一日を連れてきてくれます。インターネットが普及し、何かと敬遠されがちな新聞ですが、新聞のある生活、新聞と生きる時間がとても有意義であることを、娘たちやその次の世代にも伝えていきたいと思わずにはいられません。